

氏 名	那 須 理 香 NASU, Rika
学 位 の 種 類	博 士 (学術)
学 位 記 番 号	甲 第 1 9 5 号
学位授与年月日	2 0 1 7 年 3 月 2 3 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	鈴木大拙の「日本的靈性」——エマヌエル・スウェーデン ボルグ 新井奥邃との対比から—— Daisetz T. Suzuki's 'Japanese Spirituality': In Comparison with the Spiritual Concepts of Emanuel Swedenborg and Ohsui Arai
論 文 審 査 委 員	主 査 教 授 佐 野 好 則 副 査 元教授 古 藤 友 子 副 査 教 授 オルバーグ ジェレマイア L. 副 査 特任教授 小 島 康 敬

論文内容の要旨

この博士論文の研究の目的は、鈴木大拙が 74 歳の時に書いた代表作『日本的靈性』で提示された鈴木独自の宗教概念である「日本的靈性」がどのようなものであるかを探ることであった。鈴木は、「靈性」が宗教概念として普遍性を持つものであると考えていたようである。「靈性」概念を鈴木はどのように着想し構築したのか、鈴木の生い立ちからの考察を試みた。そして「靈性」に類似する概念との比較によって、その特質の解明を図ってみた。

この論文で鈴木「日本的靈性」の「日本的」の部分について考察する際には、鈴木「宗教意識」に寄り添った立場からとらえようとした。また、鈴木「靈性」概念形成までの動機付けや「靈」的感性が育まれた様子など、鈴木の内面の宗教的欲求に沿った解明を試みた。

本稿の構成は、次の通りである。

第一章 はじめに—先行研究紹介及び末木文美士の「日本的」批判に対する反論

第二章 鈴木大拙『日本的靈性』の「日本的」が意味するもの

第三章 鈴木大拙の「靈」的感性の目覚め

第四章 スウェーデンボルグの「靈」的世界観との出会い

第五章 新井奥邃の「心」との対比

第六章 おわりに―鈴木大拙の「日本的靈性」とは

「日本的靈性」の「日本的」とは、「日本人の自然観」によって育まれた感性であろうと考えられた。日本人が最も身近に感じる自然の代表としての「大地」が、日本人の宗教的感性を育んだと鈴木は考えた。「母なる大地」の恩恵と脅威に接することで日本人は「靈」的感受性を磨くことになり、これが仏教的世界観を受け入れる素地となったという解釈である。

末木文美士は、鈴木「日本的」の部分が「靈性」の普遍性に反して日本という国の特殊性を反映したものであり、「日本的靈性論」の限界を示すものであるとして批判した。末木は「日本的」のうち国家主義的側面についての議論を展開したが、鈴木「日本的」の立場はあくまでも宗教論であり、日本という国の社会政治的個別性を超えた宗教としての普遍性を「日本的靈性」に見ようとしていたと考えられる。

第三章では鈴木「日本的」の生い立ちから、「靈」的感性がどのように目覚め「靈性」概念形成の基盤となったかを概観した。仏教が生活文化に大きな影響をもつ金沢という土地柄に生まれ、成長の時々母や同輩たちが「秘事法門」や「坐禅」などの仏教修行に打ち込む姿を身近に見て育ち、仏教的世界観を介した宗教的感性が自然に育まれることになった。そのため、自身のアイデンティティーが危機にみまわれた青年期には、禅仏教をよりどころとして困難を克服、「安心立命」の境地を得ることができた。最愛の母の死の際には、初めて「靈」というものの存在を感じ、これが禅修行で培った感性とともに「靈性」概念を構築する基盤となったのである。

第四章では、スウェーデンボルグのキリスト教を背景とした「靈」的世界観と出会うことによって、仏教的世界観を超えた普遍的宗教概念としての「靈性」構築を目指す手がかりを得たことを確認した。鈴木はスウェーデンボルグ思想における「靈」的世界観が、「靈性」を中心とする自身の宗教的概念と同様のものであることを確信し、日本に紹介する役割を担った。そして翻訳する際にキリスト教で用いられていた「靈性」という術語を、自身の独自の宗教概念として提起することになった。「靈性」はキリスト教、仏教両者を包括する普遍概念として構築されたのである。

第五章では、新井奥邃の神学概念における「道心」が鈴木「靈性」と同様の役割を持つこと、それらとスウェーデンボルグの神学思想を比較することによって三者の「靈」的構造に類似点があること、その構造の中で「我」を尊重するか否かに

よって「靈」的中心に東洋・西洋の文化的異なりが出てくることをみた。鈴木「靈性」は、東洋の宗教の代表である仏教観を反映して、その「靈」的中心が「我」を排した部分であり、新井の「道心」と同様の構造をなすものであった。

鈴木が『日本的靈性』で提起した「靈性」という概念をまとめると次のようになる。心の奥に秘められた「靈」的特質を感知する部分によって、人間はこの世のすべてを統括する「宇宙靈（神・真理）」と密接につながっている。「宇宙靈」と「個靈」の「即非の論理」による合一である。人間は「宇宙靈」から生きるエネルギーとしての「靈性」を授けられ、それによって生命が維持される。「靈性」は人間にとっては「仏の慈悲（神の愛）」と感じられるものである。また「靈性」は人間の分別や知性を超えたものであるため、分析的な方法で理解することができない。直感的な宗教的感性でしか感知できないものである。人間がこの感性を高め、自分の中の「靈性」を直覚することによって「宇宙靈」からの「靈性」の恩恵に覚醒することが「安心立命」を獲得する道である。鈴木にとって「靈性」覚醒の最良の方法が、禅修行による坐禅だったのである。

普遍性を備え日本の風土によって培われた「靈性」的感性が、禅仏教の坐禅による「覚醒」方法を得ることによって「日本的靈性」となったことに、鈴木は大きな意義を感じていたと考えられる。

論文審査結果の要旨

2017年1月13日16:30より、国際基督教大学教育研究棟1-257にて古藤友子(元教授)、ジェレマイア・L・オルバーグ、小島康敬(特任教授)、佐野好則の各教授からなる審査委員会による審査が行われた。審査は公開され、審査委員以外に数名の学生が参加した。審査では、冒頭に那須理香氏から論文について概括的な説明が行われた後、審査委員との間で質疑応答が行われた。

2016年9月26日10:10より11:20まで国際基督教大学教育研究棟1-257で行われた最終草稿審査では、鈴木大拙の主張が国粹主義的であるという見解に対する対応を再検討すべきこと、日本人のみが特権的な自然観を持っているという認識に基づく叙述を改めるべきこと、複数の章の間の重複を整理すべきこと、さらに鈴木大拙、エマヌエル・スウェーデンボルグ、新井奥邃三者の時代背景や思想の影響関係をわかりやすくするための年表を作成する必要性などが指摘された。最終稿においては、これら指摘された諸点について、修整に向けて十分努力がなされたことが審査委員会によって認められた。そ

の上で審査委員によるコメントおよび質問と那須氏による応答がなされた。

鈴木大拙とスウェーデンボルグの比較、新井奥邃とスウェーデンボルグの比較はすでになされてきたが、本論文においてこれら三者の思想を包括的に比較することにより、鈴木大拙の「日本的靈性」について新たな角度から光を当てたオリジナリティーが高く評価された。

「日本的靈性」における、「日本」という限定性・個別性と、大拙が目指した普遍性との関係について質問がなされた。那須氏からは、大拙における「日本的」という概念は限定的に閉ざされているのみではなく、柔軟性があり開かれた側面も見出されること、また国粹主義的にみえる大拙の発言の背景には西洋帝国主義に対する対抗という時代的制約があったことに注目すべきとの応答があった。これと関係して、仏教の中で禅宗のみではなく浄土真宗など他の宗派にも開かれた態度については、大拙が育った金沢の仏教の土壌からの影響に注目しているとの那須氏からの発言もあった。さらに大拙が「日本的靈性」を普遍化する中に、日本人を人間全体の代表として位置付けようという態度も見出され、この傾向を客観的に位置付ける必要性が指摘されると、那須氏よりその必要を認識しているとの応答があった。

その他、「日本的靈性」の重要な要素とみなされてきた「大地性」を大拙自身がいかに関位置付けていたかについての再検討、大拙と奥邃との比較の基盤のさらなる整備、東洋的な無我と西洋的な我との対比という図式の再検討、大拙自身も注目していたプロテイノスの思想からの影響の把握等が、今後の研究の上の課題として指摘された。これらの諸点について那須氏からは、重要性を把握しており、論文の出版に向け、そしてさらにその後の研究の進展の上で取り組みたいと意思が示された。

審査は 16:30 より 18:00 まで行われ、その後審査委員会による協議がなされた。本論文は鈴木大拙研究に比較思想の観点からオリジナルな貢献をするものであり、著者は研究者として活躍を期待できる十分な学術的見識を持っていることを確認し、審査委員全員一致により、博士学位を授与するに価するとの結論に至った。